

ロバート・ホワイティング アウトサイダーとして 日本社会の解毒剤となる

Robert Whiting illustrates Japan through the eyes of outsiders.



しもやま・すすむ／ノンフィクション作家・聖心女子大学現代教養学部非常勤講師。著書に『2050年のメディア』（文春文庫）『アルツハイマー征服』（角川文庫）など。新刊に、がんの標準療法以降の治療法開発史の『がん征服』（新潮社）がある。

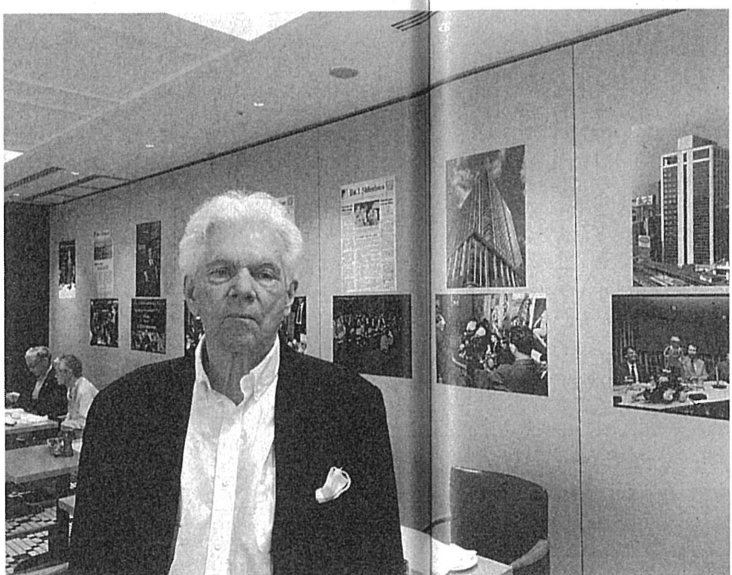
ロバート・ホワイティングは日本に住んで、60年以上になる書き手だ。1977年に日米のプロ野球を通して見た比較文化的なノンフィクション『菊とバット』で作家としてデビュー、戦後の混乱期の裏社会を六本木のビザレストラン「ニコラス」を経営する元アメリカ兵を軸に描いた『東京アンダーワールド』（2000年）は当時20万部を超えるベストセラーになった。

しかし、そうは言ってももう80歳を超えている。5月にKADOKAWAから出た『新東京アウトサイダーズ』は出がらしのようなものではなく、読んでいなかっただが、ひょんなことから読み始めると、思わず居住まいを正す迫力をもっていた。ホワイティングさんの筆の特徴は、アウトサイダーならではの切り口から見せる意外な日本の姿ということができる。

今度の『新東京アウトサイダーズ』は、戦後の日本社会にかかわったアウトサイダーたちの連作短編だ。中でも、第6章の日産のゴーン事件をとりあつた章が抜群に面白い。

私たちは司法記者クラブ発の日本の新聞記事で、ゴーン事件をずっとおいかけてきた。そうすると、強欲な経営者が、卑怯な手をつかって会社の金を自分の豪華な複数の別宅のために使ったり、退職金を

ロバート・ホワイティング。外国人記者クラブで。空軍に入隊し、1962年に府中にあった米軍基地の電子諜報センターに配属されたのが、日本にきたきっかけだった。



白い。そして日本の組織メディアにいちばん足りないのがこの点だった。

ハルバースタムに 教えをうける

デイビッド・ハルバースタムは、元ニューヨークタイムズの記者で、独立後、ケネディ政権がベトナム戦争にのめり込む過程を描いた『ベスト&ブライテスト』（1976年）や米国のメディアの興亡史『メディアの権力』（1983年）、そして日米自動車戦争を描いた『覇者の驕り』（1987年）などを著した20世紀が生んだ最高峰の作家だ。

そして、ホワイティングさんは、『覇者の驕り』の取材で日本を訪れたハルバースタムに出会い気に入られ、ハルバースタムの著者エージェントだったICMのアマンダ・シンキー・アーバンを紹介される仲にまでなったのを今私は初めて知った。

ハルバースタムは、おりにふれて印象的な言葉を残していた。

ランディ・バースが当時の吉田監督を「こんなに馬鹿な監督にはこれまで会ったことがない」と罵ったと書いたことで、ホワイティングさんが日本のスポーツ紙から「嘘つき」と攻撃された1985年の

こっそり水増しをしていた、それを裁こうとしたら国外逃亡した。ゴーンと一緒に起訴されたグレッグ・ケリーという代表取締役は、ゴーンの水増し退職金の隠蔽工作にかかわっていたけしからぬ奴ということになる。

しかし、それは、検察から情報をとっている記者たちインサイダーから見た事実であって、アウトサイダー的な視点から見ると、まったく違う側面が見えてくる。

ようは、日産は、ゴーンが経営から離れ他社に移ってしまふことをおそれて、隠れ退職金というスキームをとったのにもかかわらず、ゴーン追い落としのためにそれを検察に売った勢力があり、グレッグ・ケリーは無実にもかかわらず、巻き添えになったということだ。

物事はひとつの方向だけから見ていると、ゆがんでくる。ホワイティングさんは、ゴーンが無実だと言っているわけではない。日本にきたアウトサイダーが、会社を立て直すと、それがうとましくなり、見事に足をすくった、と書いているのだ。しかし、それによって日産自体がどうなったかといえば、（ゴーン逮捕後の企業収益率は、ゴーンが日産に着任した当初と、たいしてかわらなくなった。日産の報告によれば、六十三億ドルの損失だ）ということ、ゴーンが着任前の身売り寸前だったあの日産に戻っただけ、ということなのだ。

東京ドームに 二度の立ち入り禁止

82歳になったホワイティングさんと、皇居近くにある外国人記者クラブでランチをとった。ホワイティングさんは、日本の記者クラブ制度が様々な事象を当局の筋書きどおり伝えることで、人々はそのゆ

こと。バースはオンレコードのインタビューで吉田の批判をしたのだった。録音もある。そのことをハルバースタムにこぼすところすぐに返してきた。

「彼らこそ恥じるべきだ。彼らは自分を記者と呼ぶ資格はない。奴らがやっているのは馴れ合いジャーナリズムだ」

ハルバースタムが『覇者の驕り』を日本で取材していた際、日産は協力的ではなかった。しかし、ハルバースタムはこの本のあとがきでこう書いている。

（このことのマイナス面は、多くの時間が浪費されたとしたことだったが、逆にプラス面としては、この結果私は非公式の情報源をみつける努力を一段と強めたということだ）

「今の書き手は事前に原稿を取材先に見せています」ということをある編集者から面と向かって言われて、私は哑然としていたこともあり、ハルバースタムとの思い出を語るホワイティングさんとのランチは心洗われる時間だった。

ホワイティングさんは、夕刊フジが休刊となることに心を痛めていた。18年間、週一のコラムをそこに書いていたのだ。それも年明けに終わる。

これでホワイティングさんの書いている日本語のコラムはなくなってしまうことになる。

しかし、82歳の作家には、次の本の原稿がすでに出来上がっているのだという。『新東京アウトサイダーズ』のうちの一章を使って書いている日産の事件を、グレッグ・ケリーの視点から捉えなおすという本だ。ケリーにはすでに何度もインタビューをし、あとは、来年2月の彼の控訴審の判決を入れるだけという状態になっている。

そしてこの本の出版先は少なくとも日本ではまだ決まっていないようだった。

私は読んでみたいと思う。

次回11月4号（10月28日発売）に掲載予定です